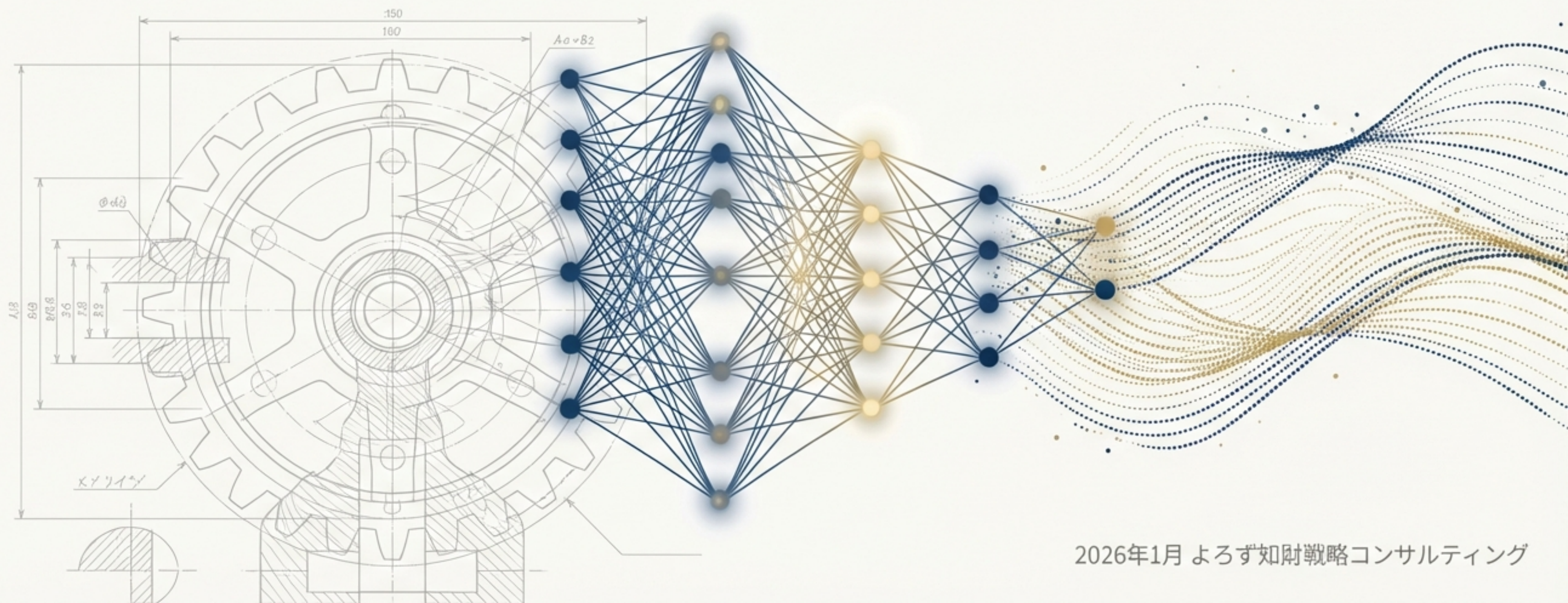


「賢いAI」から「稼ぐAI」へ

権利保護業務の自動化と、価値創造に向けた戦略業務への構造転換



2025年のパラドックス：「超人的な賢さ」と「現場での無力さ」

最新のAIは、数学オリンピックの難問を解き、司法試験で上位に入る「IQ」を獲得した。しかし、企業の現場では「詩は書けるが、自社の特許分類コード一つ振れない」という「賢いが使えない」状況が散見される。



AIの能力

- 数学オリンピックの難問を解く
- 司法試験で上位成績
- 複雑な多段論理をこなす



現場の現実

- 特許分類コードを正確に付与できない
- 社内規定に準拠した回答ができない
- 特許調査で「致命的な漏れ」を起こす

AI研究者・今井翔太氏の指摘：「AIの評価軸は『難問が解けるか』から『仕事にどれだけ貢献するか』へ決定的に転換した」

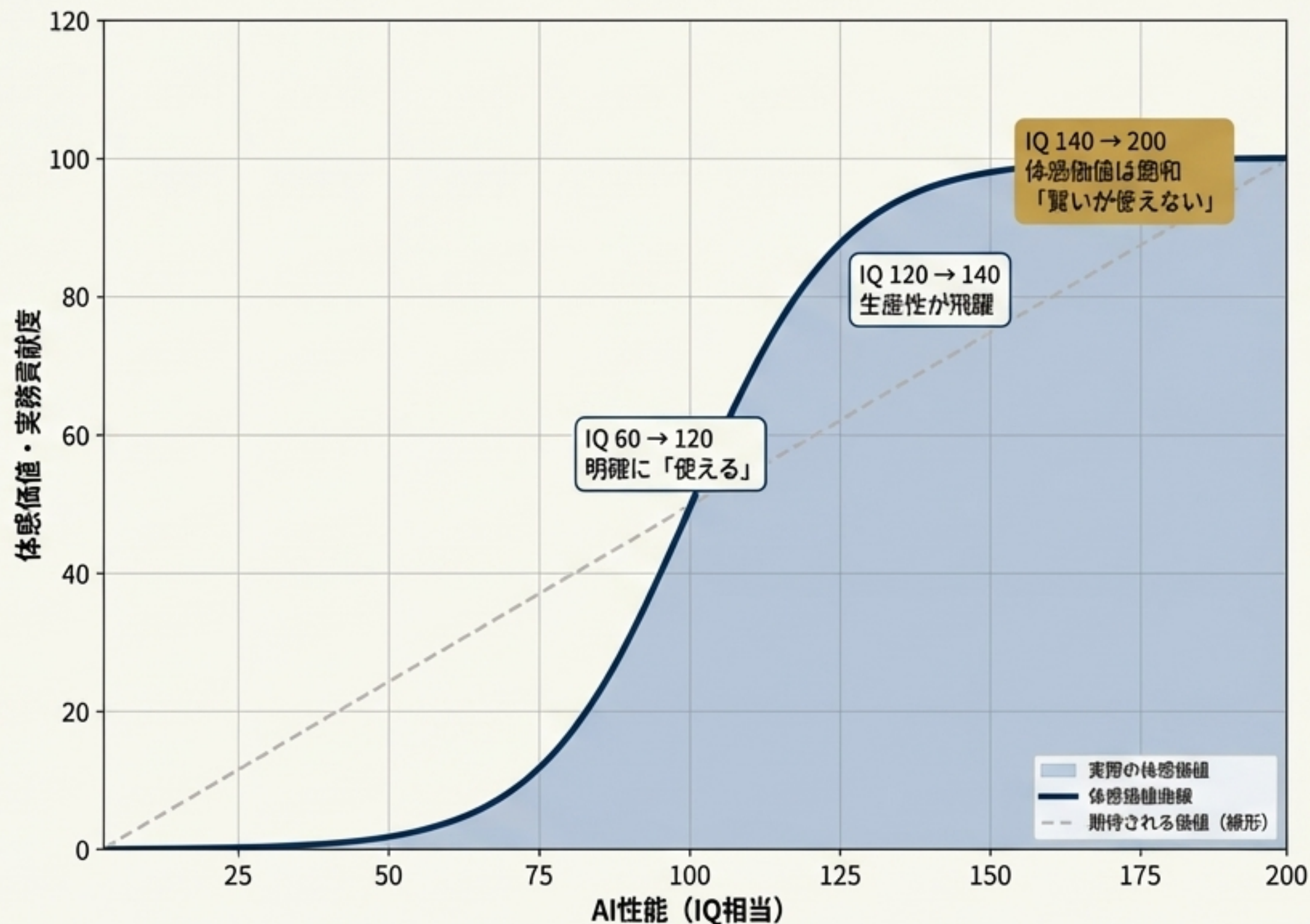
「ベンチマーク」という幻想の終わり：賢さのインフレと体感価値の乖離

2025年までのAI開発は、
MMLU等のスコアを競う
「偏差値競争」だった。

かつて、ベンチマークスコアの上昇は「便利さの向上」を意味した。

- IQ 60 → 120: 明確に「使える」ようになる
- IQ 120 → 140: 生産性が飛躍

現在は **IQ 140 → 200** の領域。AIの知能の増分が、もはやビジネス上の体感価値に反映されにくくなっている。



ビジネスの現場で求められるのは「一般教養の高さ」ではなく「特定文脈への適応力」。

我々が抛り所にしてきた「賢さ」の指標は、価値創出の羅針盤としての機能を失った。

新たな羅針盤「GDPval」：AIを「あてにする」ための新指標

GDPval（経済価値ベースの評価） - "そのAIモデルがどれだけの**経済的付加価値（GDP）**を生み出したか"

FROM（旧来の評価）

正解率
(Accuracy)

問い：❌「正解を出せたか？」

TO（GDPval時代の評価）

信頼性 (Reliability)
+
コスト対効果 (ROI)

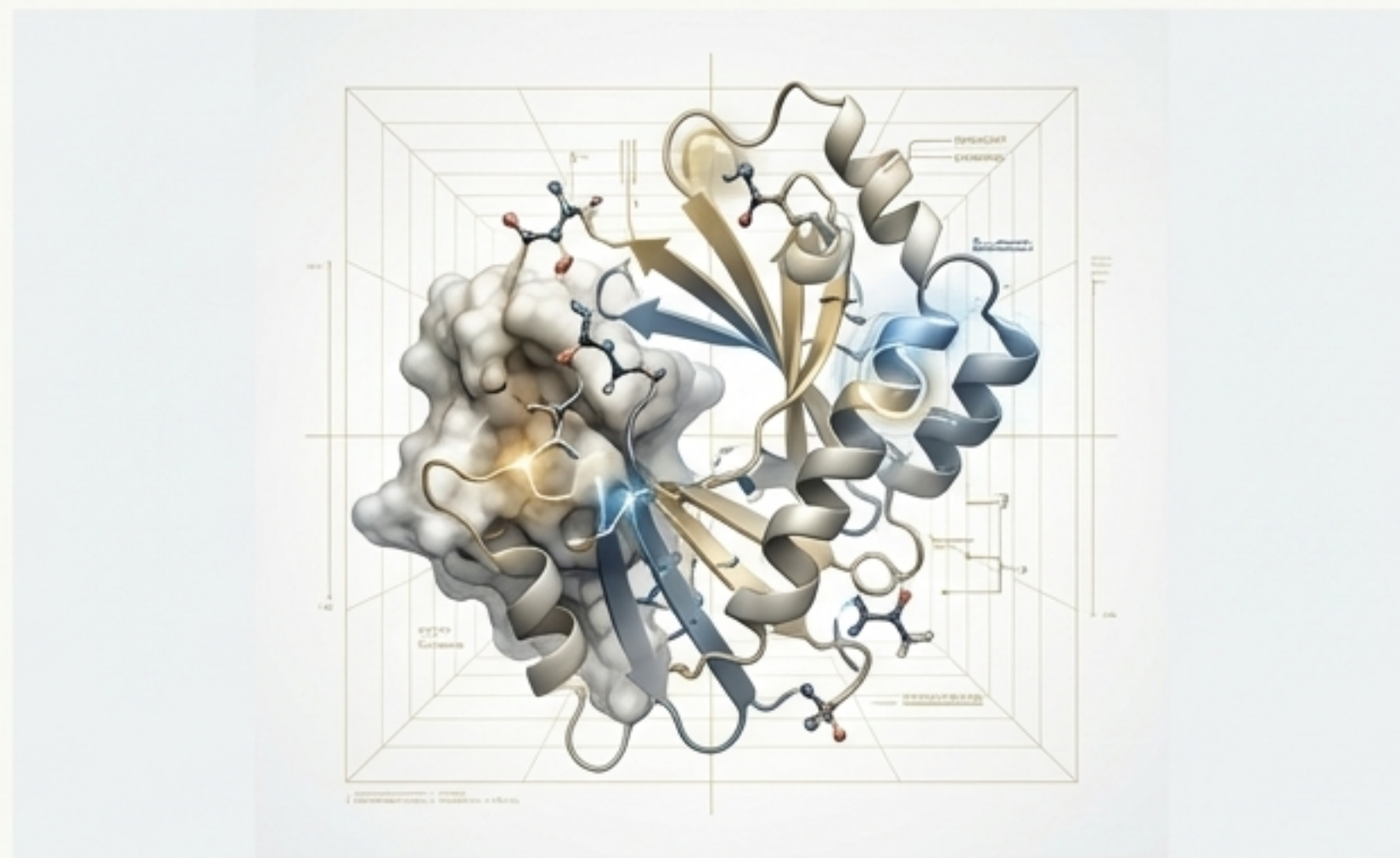
問い：✅「業務フロー全体に、
どれだけ価値を生んだか？」

これは単なる新ベンチマークではない。AI研究が「**性能競争の前半戦**」を終え、「**価値創出競争の後半戦**」に入ったことの宣言である。企業は今後、「AIによって業務プロセスがどれだけ短縮され、リスクが低減されたか」というアウトカムでのみAIを評価する。

2026年、競争のルールを書き換える二大潮流



動画生成AI:
製造業の「暗黙知」がデータ資産に変わる

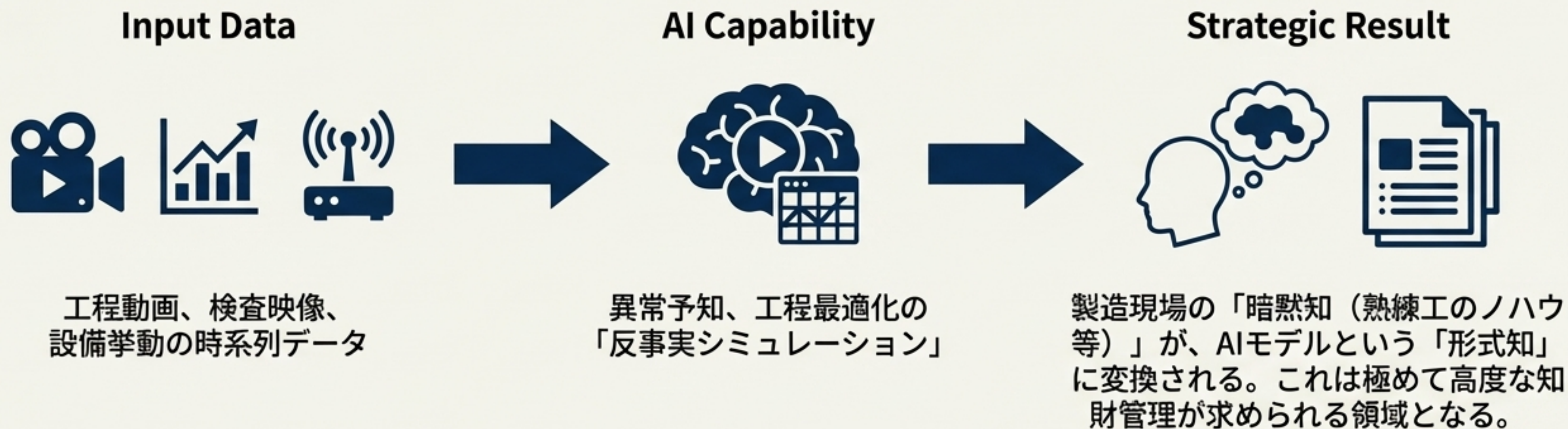


AI for Science:
発明の「自律化」と「民主化」

これらは単なる技術トレンドではない。
産業競争と発明創出のあり方を根底から覆す、地殻変動である。

潮流① 動画生成AI：工場の「暗黙知」が形式知となり、競争優位の源泉となる

動画生成AIは単なる表現技術ではなく、画像・動画・空間・時間を統合理解する「世界モデル」として機能する。



The New Bottleneck

技術の成熟度ではなく、「計算資源へのアクセス（GPU・電力・データセンター）」が実装速度を決定する。
インフラが新たな競争の戦場となる。

潮流② AI for Science：発明は「ひらめき」から「パイプライン」の時代へ

AIは研究の「助手」から「共同研究者」へ進化。「Self-Driving Lab」が現実のものとなりつつある。



仮説生成



文献探索



実験計画



データ解釈



論文草稿

FROM: 実験を「行う人」
(Executor of experiments)



TO: 評価軸を「設計する人」
(Designer of evaluation criteria)

「発明の民主化」

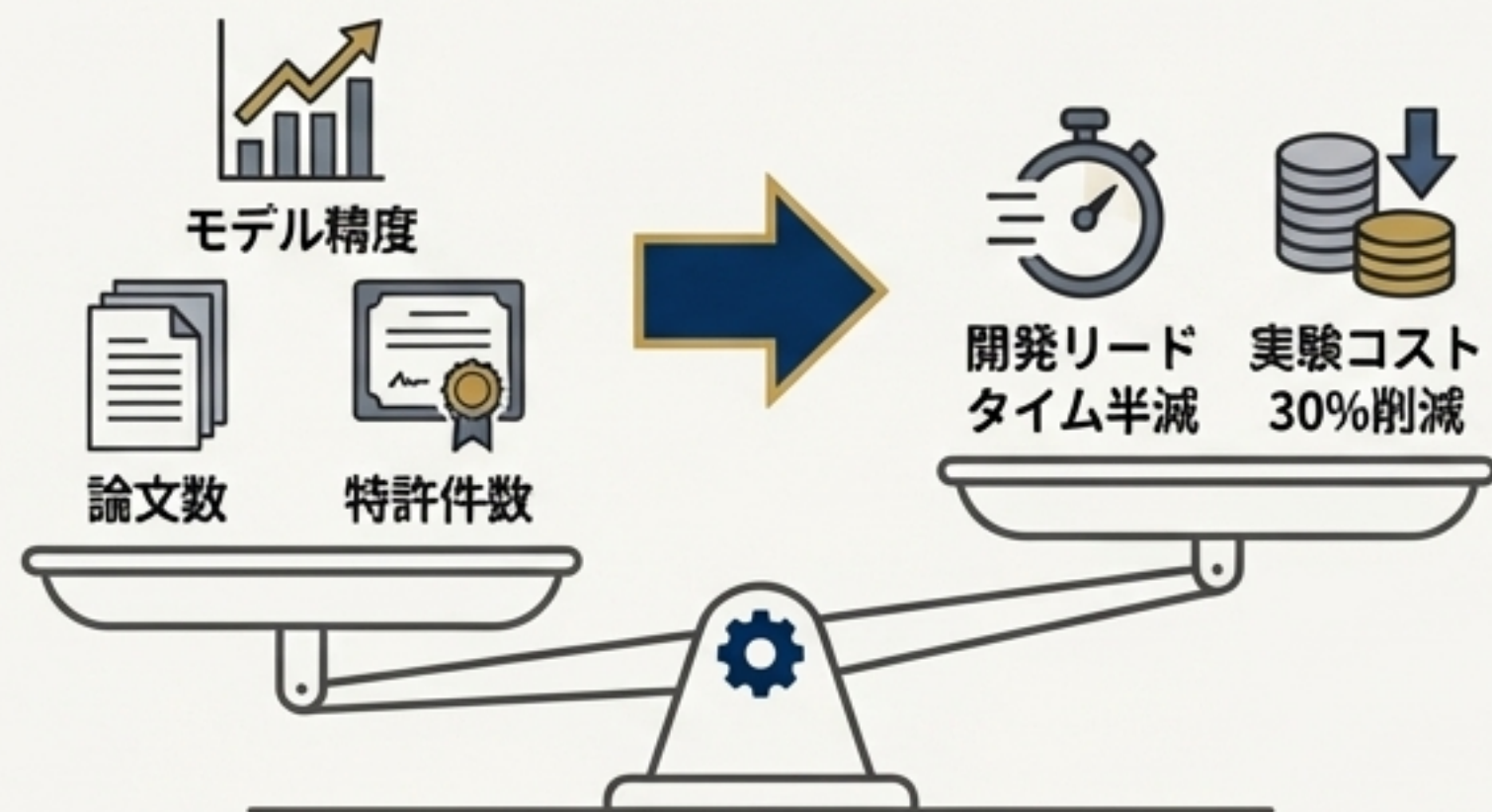
2026-2028年、AIが新素材や新薬候補を大量かつ高速に生成する。

R&Dの競争ルールが、個人の「ひらめき」から組織の「探索アルゴリズムの性能」へと変わる。

新たな戦場を勝ち抜くための戦略転換

AIがもたらす構造変化は、R&Dと知財のKPIを根本から変える。

評価の転換 (Shift in Evaluation)

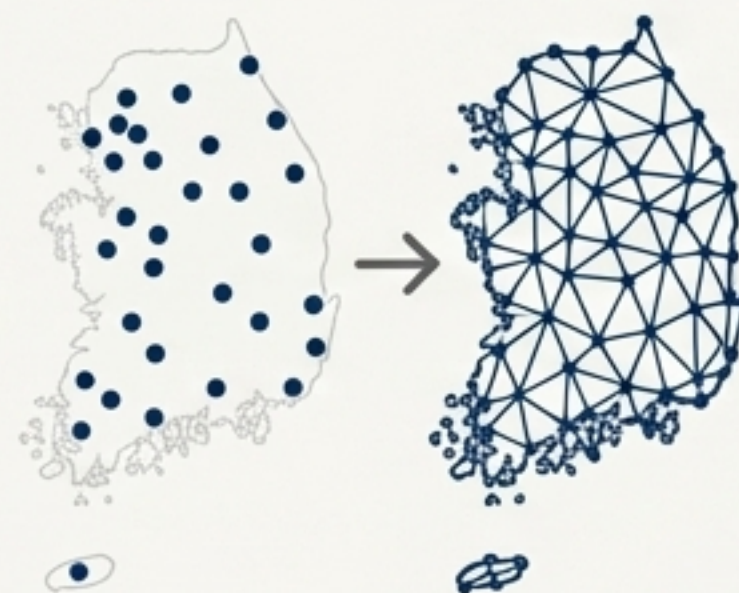


FROM: 成果物 (Outputs)
- e.g., モデル精度、論文数、特許件数

TO: アウトカム (Outcomes)
- e.g., 開発リードタイム半減、実験コスト30%削減

発明の「メッシュ化」とデータの「要塞化」

発明の「メッシュ化」 (Invention Meshing)



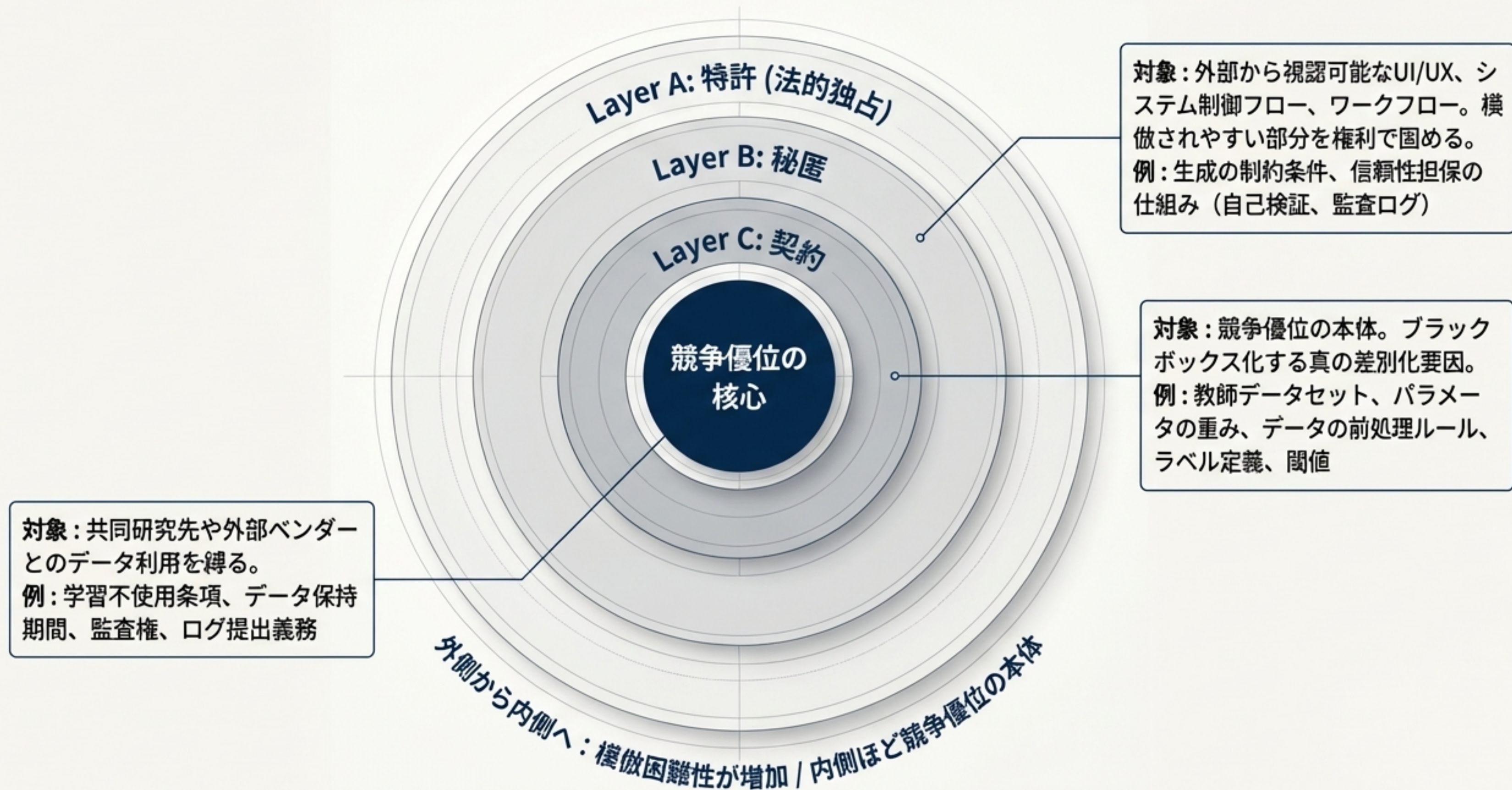
AIが生成する無数の「サブ発明」が技術領域を埋め尽くす。特許を「点」ではなく「網」として設計する必要がある。

データの「要塞化」 (Data Fortification)



競争優位の本体は、インターネットの知識ではなく「社内現場データ（実験ノート、工場動画等）」。
この価値が急騰する。

三層ブロッキング戦略：特許×秘匿×契約による複合防御



発明の粒度管理：S/M/Lバスケット方式によるポートフォリオ最適化

Basket S (Strategic)



対象：コア技術（新規メカニズム、基本物質など普遍性が高い発明）

戦略：強力な特許網。広い独立項＋多数の従属枝で徹底的に守る。

Basket M (Model)



対象：適用・最適化（AIが見つけた「勝ちレシピ」、特定条件下での最適パラメータ）

戦略：数値限定発明として権利化。用途・条件・パラメータ範囲でクレーム階層化。

Basket L (Logistics)



対象：現場ノウハウ（データ前処理、実験手順の工夫など）

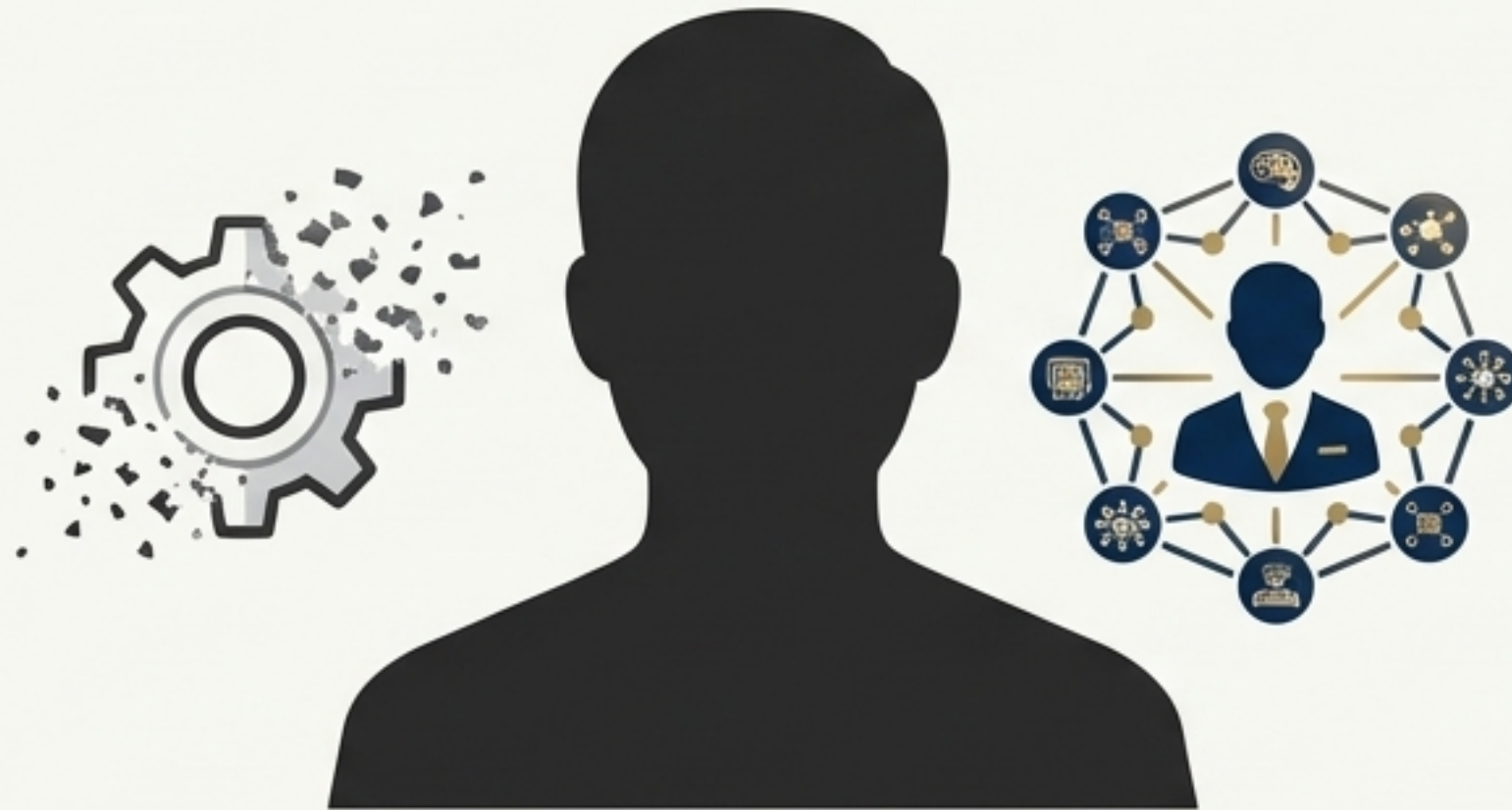
戦略：原則秘匿。侵害検出が困難なため、ブラックボックス化。

出願判断の5問即決法（YESが3つ以上なら出願）

1. 競合が再現しやすいか？
2. 侵害立証が可能か？
3. 価値がコア性能に効くか？
4. 代替手段が多いか？
5. 実施例・データが揃っているか？

知財部員の進化：手続きの代行屋から「AIスーパーバイザー」へ

The Challenge: ブラックボックスAIは知財実務で致命的。
AIの出力を法的に監修し、リスクを設計する役割が求められる。



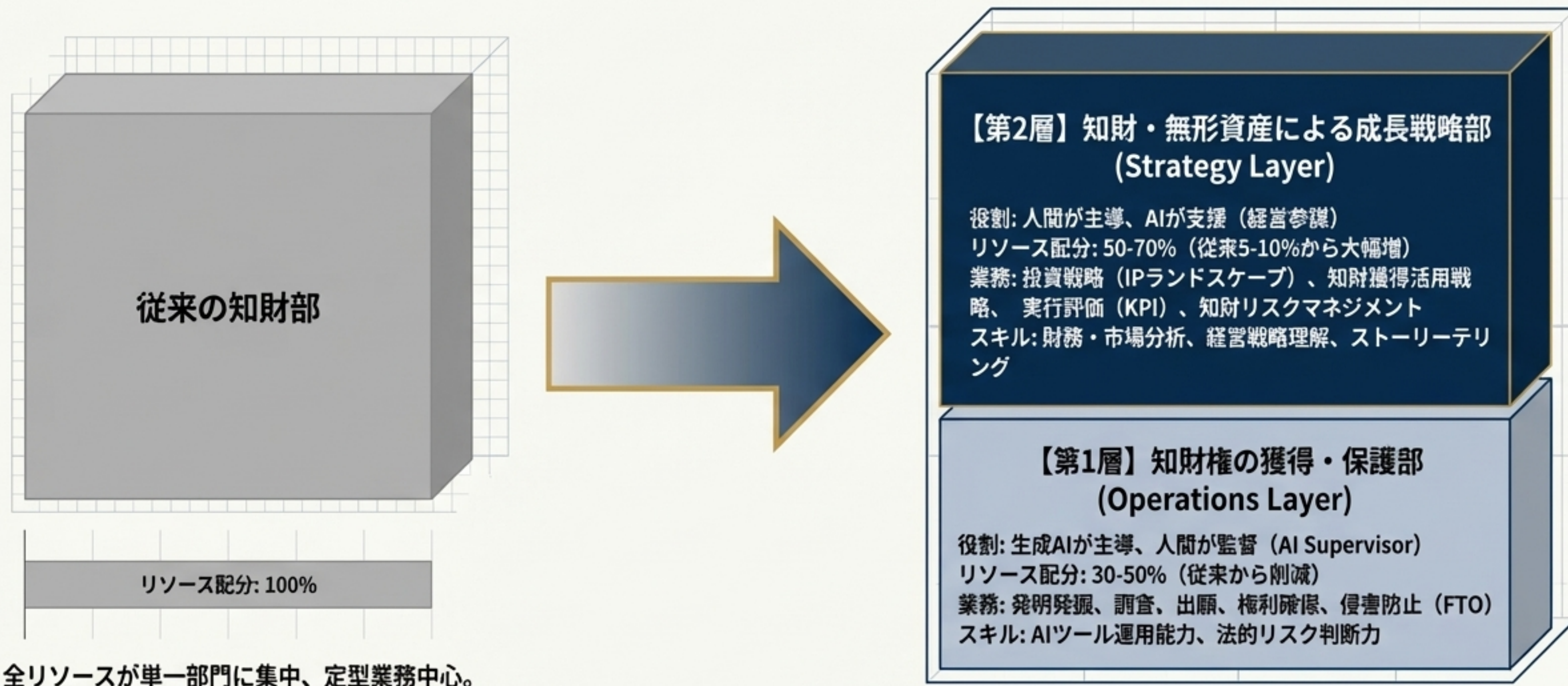
AIスーパーバイザー (AI Supervisor)

New Priorities in IP Operations

- 1. 監査可能性 (Glass-box)**
調査ログ、検索式、根拠リンク、生成履歴の整備が必須。
- 2. 失敗の仕方の設計 (Risk Design)**
不確実性の表示、根拠不足のアラート、断定回避。
- 3. 業務直結の指標 (Business-Linked KPIs)**
先行技術調査の再現率(Recall)、OA応答リードタイム、明細書の補正回数。

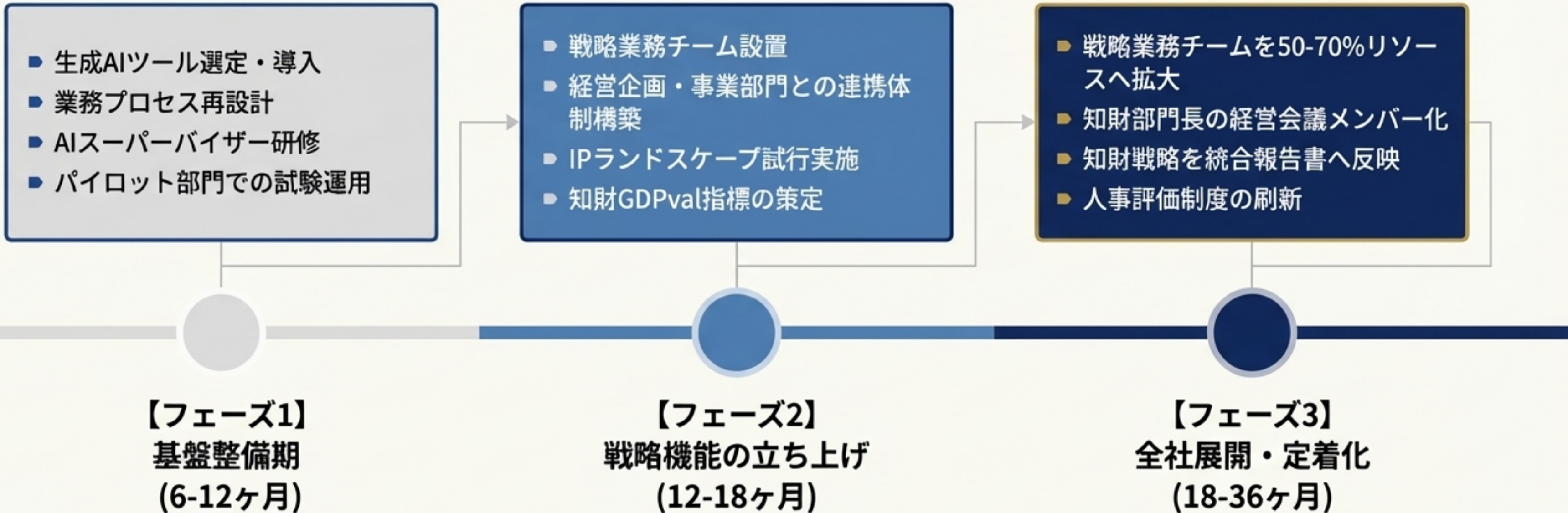
知財部員はAIの「実行者」から、その品質とリスクを管理する「監督者」へと進化する。

知財部門の再発明：定型業務から価値創造へ、2層構造への転換



生成AIは、知財部門を「作業部隊」から「戦略参謀」へと進化させる触媒である。

組織変革の実行ロードマップ



知財×AI投資のROI：コストから「未来への投資」へ

$$\text{ROI(\%)} = \frac{(\text{①戦略業務貢献} + \text{②開発前倒し効果} + \text{③リスク回避価値} + \text{④生産性向上} - \text{AI投資コスト})}{\text{AI投資コスト}} \times 100$$

① 戦略業務による 事業貢献額



Layer 2へのシフトが
創出する新規ビジネス
価値や損失回避額。

② 開発前倒し効果



FTO調査短縮による製
品上市の前倒し価値
(Time to Market)。

③ リスク回避価値



無効化資料発見による
想定訴訟・差止損失の
低減額。

④ 生産性向上



知財業務の工数削減 ×
人件費。

【最重要ポイント】

価値は「④生産性向上」だけではない。「①戦略業務貢献」「②開発前倒し効果」「③リスク回避価値」を分子に組み込むことが、この変革の正当性の根拠となる。
「空いた手で、より付加価値の高い戦略業務を行うこと」こそが最大の価値である。

AI時代の「経営参謀」として

AIが「賢さ」の頂点を目指した2025年を経て、2026年はその賢さを「役立つ」形に飼いならす年となる。

知財プロフェッショナルの役割もまた、不可逆的に変わる。手続きは優秀なAI部下に任せ、人間は市場・技術・財務の三位一体でビジネスモデルを描く「成長戦略」にこそ、その知性を注ぐべきだ。

「AIを使って定型業務を終わらせ、人間はより高次の価値創造へ挑む」

この構造転換（シフト）を成し遂げた組織だけが、2026年の勝者となる。

評価を制する者が、AI時代の知財を制する。